

詩
の
清
申
石鳥
著

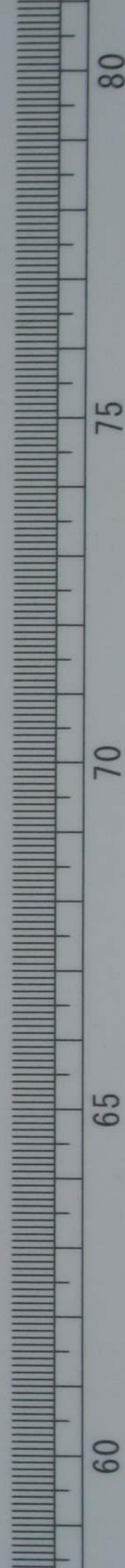


詩集 土の精神

山村暮鳥著

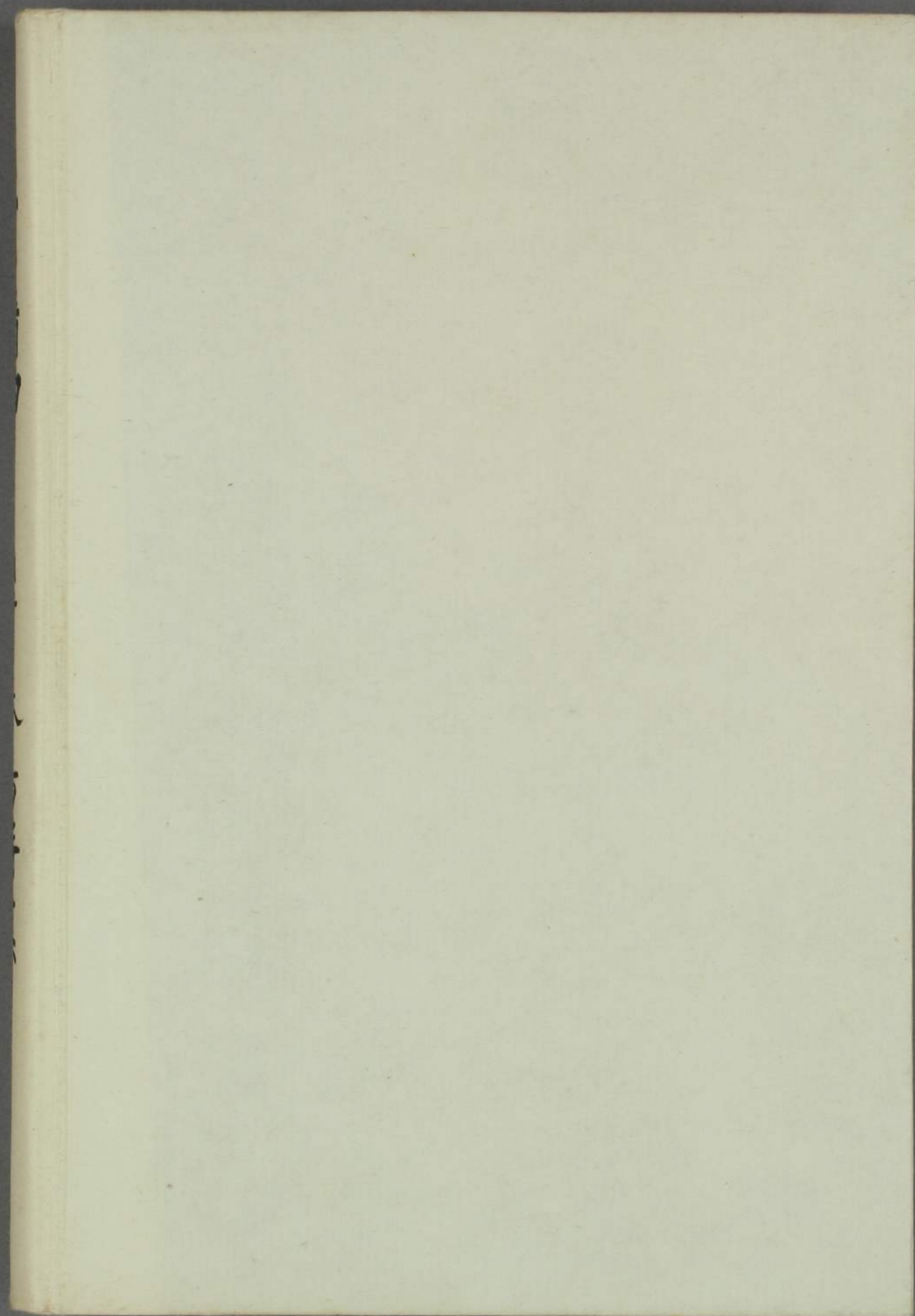
素人社

5, 43



土の精神

山村暮鳥詩集





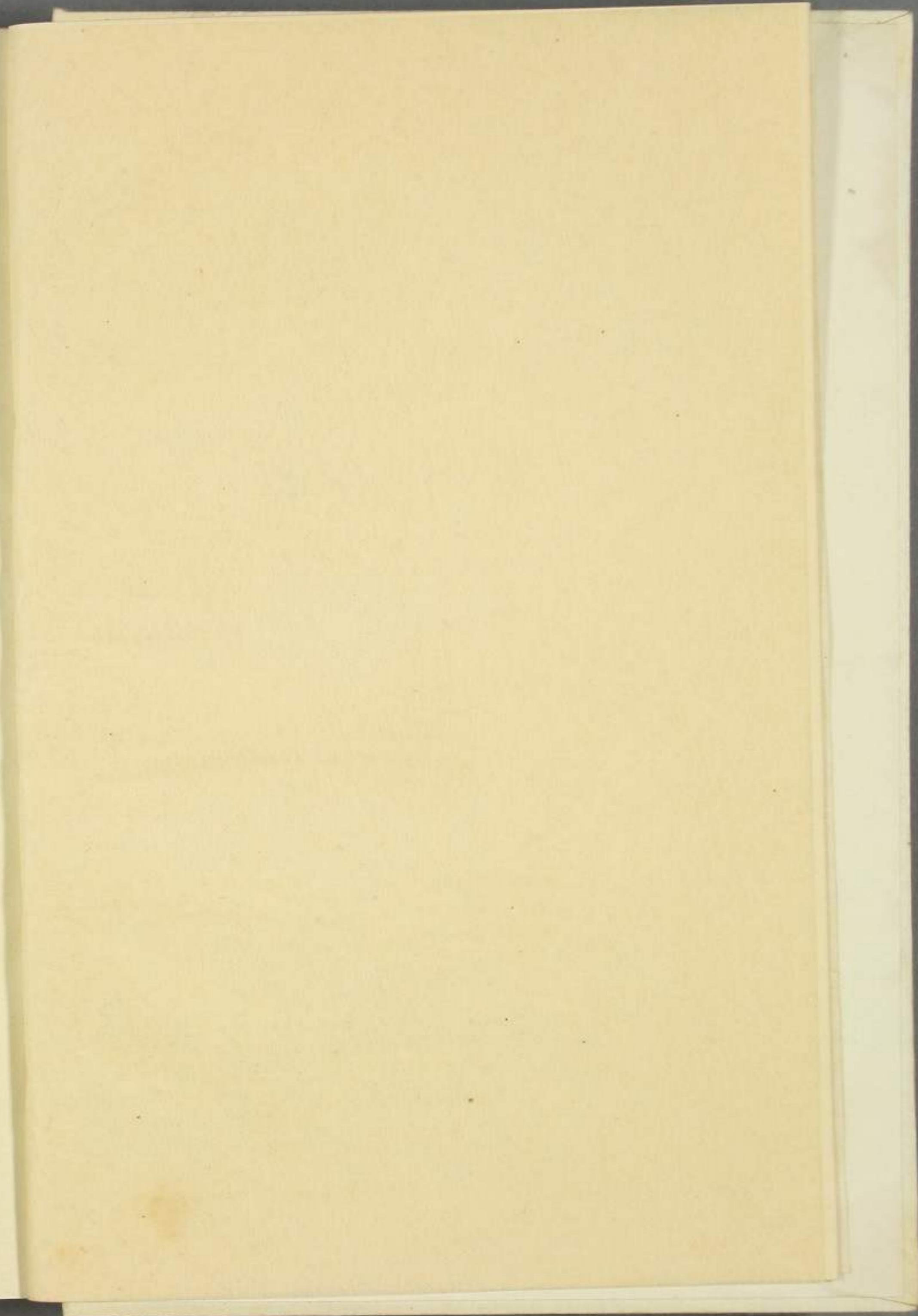
詩集
土の精神

山村暮鳥著

東京都
素人書屋
藏版



[Faint, illegible text or markings on the right page]



縞鯛の唄

折角釣つてはみたものの

あまりにも

あまりにも

小さいので

そつとまた海に歸した

一びきのかわいい縞鯛

海にまたかへす

そのとき

としよりはかぶりをふつて

(くひものに

これではならぬ)

土の精神 目次

縞鯛の唄 (序詩)

永遠の子どもに就て (一)

郊外小景 (五)

朝餉の食卓 (八)

遠いふるさと (一〇)

春 (一四)

妻と語る (二三)

雷雨の時 (三〇)

蟹 (三元)

鶏 (四)

家常茶飯詩 (五)

虱捕り (六)

聖母子圖 (七)

紙鳶 (八)

一鉢の花 (九)

春 (一〇)

季節をつげる漁婦達 (一一)

ある時 (一二)

父に書きおくる (一三)

ゆふがた (一四)

鯨に (一五)

自分はよく知つてゐる (一六)

時計 (一七)

黒い土 (一八)

雪景 (一九)

虹 (二〇)

星を聴く (二一)

麥島にて (二二)

母 (二三)

星天に讀す (二四)

田園風景 (一七五)
庭の一隅 (一八〇)
春 (一八三)
雪について (一八五)
雪景 (一九〇)
冬 (一九三)
鴉 (一九五)
走馬燈 (一九七)
雪 (二〇四)
飛行機 (二一七)

土の精神 目次 畢

詩集 土の精神

装幀及挿畫・小川 芋 錢

永遠の子どもに就いて

ああ お前は

お前はどこにねむつてゐたのか

なんといふ深い睡りにおちいてゐたのだ

ほんとにお前は甦よみがはつてでもきたようにみえる

お前はいつみてもみづみづしく

お前はいつもいのちに充ち溢れてゐる

お前はちからだ

お前はのぞみだ

お前があるので醜い世界もうつくしく
そして人間銘々は生きてゐるのだ

永遠の子どもよ

永遠の子どもよ

お前をみうしなつてからの自分が
どんなにひどくなるしんだか
くるしみくるしんできたことか

お前は知るまい

だがそれでいい

それでら

何もきいてくれるな

前額ひたひにふかい此の皺々

ふしくれだつた此の手

さては冬枯れの野面のようなところ

それらについて

自分はなんにもいひたかない

自分からいつとはなしにきえうせた永遠の子どもよ

それでも自分をわすれずに

よくまあかへつてきてくれた

ああ お前は

お前は一どかへつてきてくれた

草や木のみどりのようにかへつてきた
蒼空のとんぼと一しよにかへつてきた
そしていまもいとて
もろこし畑のどこやらで
鳴くギツチョンをきいてゐる
自分のうちにめざめてお前は

それはさうとお前の瞳には
どうしたものか
あけぼのの寂しさがある

郊外小景

とほくとほく
天のはてにみえる
山脈の
はつきりとした紫紺色
そのいただきは
まつ白だ

よくみると

その山かげからほそぼそと

一すぢのうすい煙が立つてゐる

おや、あんなところにも

自分達とおなじような

人間がすんでゐるのだらうか

それなら

あの煙のしたには

鶏もないてゐるだらう

子どももあそんでゐるだらう

なんだか

そこがたいへん

いい國のような氣がしてならない

この麥畑の徑を

まつすぐに

どこまでもどこまでも

いつてみたいような氣がしてならない

朝餉の食卓

ぜいたくのかぎりをつくしたものではないか
自分達のこの食卓は
青葱のいつものくさい味噌汁のほか
かうしてはるばる遠いハヨダテのともから
おくられてきたばつかりの鈴蘭が
まだいきいきと匂つてゐる
何といふ朝餉だらう

それだのに子ども達の
ちつとも幸福さうでないのを
さて、どうしたらよからふ

遠いふるさと

遠いふるさとの

その初冬をおもひだして

自分は郊外にきてみた

父のふるさとがどちらにあるのか

そのゆくさきざきでうまれる子ども達は

その方角さへも知らないのだ

その子どもたちにも

そちらの雪の山々でもみせようと

郊外につれだつてきてみた

けれど もうとつぷりと

夕靄がたちこめてゐて

なんにもみえない

ひろびろとした麥畠にてて

自分達のみたのは

さびしい電線のはりがねと

曲りくねつた田舎道

そのうへをとほく

おもちやのような人力車が一つはしつてゆく
ただ、それだけ

そんなものをみにきたのではなかつた

だが、さうしたものでもみてゐると

はるかに

はるかに

その廣い郊外のはてに

山々を越えたあちらに

いまもむかしのように

はやくも雪で純白まっしろにうづもれてゐるであらう

自分のふるさとがあり

自分を手招いてゐるのであつた

春

はるだ

はるだ

そしてあさだ

あめあがりだ

ああ いい

しつとりとぬれたつちから

たちのぼるすいじょうき

そのうへに

ひとむれのはむしがゐる

こなゆきのような

ごみのようなはむしだ

ふわふわ ふわふわ

はむしはちつたり

またかたまつたり

なんといふ

たのしさうなことだらう

ふわふわ ふわふわ

わづかにいちにち

せいぜいふつかのいのちだけれど

ああしてむしは

そのいのちのかぎりを

たのしんでゐるのだ

みんないつしよにむつまじく

ふわふわ ふわふわ

はるのあさの

このひかりのなかをおよぎまわり

そのひかりをすひ

そのひかりにいきて

そしてよろこびたのしんでゐるのだ

みてゐると

まるでダンスでもしてゐるようではないか

じぶんたちにはきこへないが

きつとうたもうたつてゐるだらう

ああ りら

はるだ
はるだ
そしてあさだ
あめあがりだ

それなのに
じぶんたちにんげんにばかりは
どうしてかうもくるしみやかなしみが
それこそはぐさのつるのように
からみまっはつてはなれないのか

それとも、ああして
ただよろこびたのしんでゐるようにみえる
むしけらにもそれがあるのか
あのつかのまのいのちのむしけらにも
いや いや
そんなことはあるまい
それにしてはあまりにはかないいきものだ

ああ、ただいのちをもつてゐるといふばかりに
むしけらはむしけらとて

よろこびたのしみ

にんげんはかなしみそしてくるしむのか

だがそれでいい

それでいい

いつかはじぶんたちも

このかなしみくるしみをつきぬけて

そこにまことの

とこしへのひかりをみつければだらう

こんなはるの

こんなうららかなあさ

そのときこそはじぶんたちも

このいのちのかぎり

ふわふわ ふわふわ

ふわふわ ふわふわ

そのとこしへのひかりのなかで

ゆうゆうとたれもかれもみんなめいめいに

たましひのそのおほきなつばさをひろげるだらう

ゆめのようなはなしだ

ゆめのようなはなしではあるが

そこにじぶんたちの

そればかりでいきてゐられるのぞみがあるのだ

おのおののゆめをげんじつに
おのおののげんじつをゆめに

ふわふわ ふわふわ ふわふわ

妻と語る

そのぬひばりを針坊主に刺して

まあ、きて御覽

妻よ

これがお前と自分のこしらへた畑だ

庭隅を堀りおこした

一坪ほどの土ではあるが

それでも

ここにまきつけられた種子は
ここをしんじつの母胎として
かうしていきいきと
芽をふき
葉をだし
するすると蔓までのばした

そのぬひばりを針坊主に刺して
まあ、きて御覽
妻よ
にんげんならば手のような蔓は

自分が立ててやつた枯木に
それをどんなにまちかねてゐたのであらう
すぐ、ああしてからみついて
いまみるともう
遠い山脈のいただいてゐる雪のようなそんなくつきりした花を
あちらこちらにうつくしくつけはじめた
そら、ね
まつたくこれはおもちやのようの畑だけれど
かうして葉と葉があをあと
もりあがり
かさなりあつて

風にひらひらしてゐるところは
どうみても大森林のようではないか

ほら、蝶々がやつてきた

ほら、縞とんぼがとびたつた

そこにかまきり

どこかにかくれて

鳴いてゐるさりぎりす

それから

そこらを跳ねまはつてゐるのは機^{バツ}織の子だらう

ああ、いい

ああ、いい

まあ、きて御覽

自分達もそうした仲間であつたらなあ

妻よ

こんな酷暑だ

かんかん熬りつけられるような

そんな眞夏のまつびるまだ

いかに自分達のことはいはないにしても

自分はしみじみ

みてゐる目でも涼しいその葉かげを

子ども達のためにおもふよ

ほんとに、これは

おもちやのような畑ではあるが

お前と自分で

こしらへたんだ

そしてなんといつでも

小さな可愛い蟲けらにとつては

うつくしい自然の大森林であらう

もうあんなに

筴豆もぶらさがつた

雷雨の時

遠くからごろごろと

まるで何處かで靱磨りでもはじめたようにきこえる

かみなりだ

かみなりだ

いい音だな

ほんとにひさしぶりできくんだ

ああ、いい

まあどうだい

なんといふすばらしい雲だらう

きつとかくれてゐるんだらう

山の背後から

むくむくともりあがつてでてきた

はやいもんだな

みるみる

もうあんなに擴がつた

ごろごろ、ごろごろ

ほんとにいい音だ
だんだんちかくなつてくるやうだな
や、ひかつたぞ

あれ、あれ

畑の百姓達がどうだい

鍬や肥桶をひつかついで

びよんびよん

びよんびよん

機^{バグダ}虫か蝗のように逃げだしたつてば

ああ、いい

たうとう雲は

自分達のあたまのうへまでかぶさつてきた

墨汁をながしたよな雲だな

ああ、いい

あ、あ、縣道をおもちやのような

自轉車やじんりきのはしること

犬も驅けてゆく

豚もかけてゆく

あの荷馬車はどうしたんだらう

畜生がいふことをきかないんだな

あや、寝ころんでしまつた

あれでは

馬方も氣が氣ではあるまい

そんなことにはとんちやくなく

かみなりはごろごろ

いなびかりはびかびか

あの彼方の森や田圃のはうは

いままではずきりとみえてゐたつけが

たちまち

ぼかしたようになってしまつた

もうふつてゐるんだらう

おや、そんなことをいつてゐるまに

ぼつり、ぼつり

ここまで、や、落ちてきた

はやいもんだな

威勢のいい雨だな

まつたく豆熬りでもしてゐるようぢやないか

ああ、いい

ああ、いい

おうい、干物をはやく取りこめ

なかなかの大粒だぞ

底抜けにやつてきそうだぞ

ばらばら

ばらばら

ああ、いい

かみなりがなんだ

いなびかりがなんだ

みんな、だれもかも素裸になつて

とびだせ

とびだせ

いきかへれ

ああ、いい雨だ

いい夕立だ

これのとほりすぎたあとの

そのすがすがしさもおもふがいい

からりと洗ひきよめられたような蒼空に

大きな虹

そこで世界が

おとぎばなしの國になるんだ

もう、生きてゐることのありがたさ

これだから
これだから
なんといつても
生きることはやめられないんだ
それはありがたすぎるほどでさえある
ああ、いい

蟹

自分はそのとき一びきの蟹であつた
そして渚の小さな孔にはひこんでゆくのであつた
まあ、なんとくらいふ暗黒さだらう
自分はおもはずふりかへり
ひよつこりと首だけだして
外をながめた
其處にゐたときには
それほどとも氣附かなかつたが

それこそ外は、みてもまぶしい光明遍照の世界であつた
だがどんなにくらくつても

また、どんなに陰鬱で汚くつても

これは自分の孔だ

これが自分の孔だとおもふとうれしかつた

泌々とうれしかつた

そこにも蟹が三びきゐた

おう妻よ

子どもたちよ

わたしをまつてゐてくれたが

しかし、けふはなんにも獲物がなかつた

鶏

朝からの糠雨は

じめじめと

なかなかやみさうにもなかつた

わたしは籐椅子の上で

あふむけになつて

そして本を讀んでゐた

と、ちらり

白いものがわたしの眼をかすめた

わたしは読んでゐた本を手ばなして

窓硝子ごしに

首をねぢむけて

その白いものをみた

それはも一はの霜ふりいろの鶏にをつかけられて

にげてゆく鶏であつた

わたしはちよつとびつくりしたが

すぐにおもはず頬笑んだ

どちらも雄鶏であつた

白いのは肺病やみの家のであり

その白いのを

おつけていつたのは

意地悪婆さんの家のであつた

そしてそれは隣同志であつた

隣同志であつて

雄鶏はたがひに仲がよくなかつた

またそのばあさんの家に

霜ふりいろの奴が買はれてなかつた頃ゐたのは

鶏冠のたかいそしてかつぶくのいい

玉蟲色のしやれものであつた
それにくらべると

やや白いはみをとりがした
けれどなかなかつよかつた

よるとさわるとたたかつたが
べつとりと

血まみれになつて

どちらもまけてはゐなかつた

誰かにみつけられて追ひ拂はれでもしなければ

そこでどちらも

すばらしい勇者の最後をみせただらう

ところが

ある日、ころりと

その玉蟲色のしやれものが死んでしまつた

その強かつた蹴爪の趾をふんばつてしまつた

そのときからだ

白いのが威張りだしたのは

そして世界がまつたくそれのになつたのは

それから二三日過ぎると

いまままで玉蟲色の一しよであつためんどうりは

もうそのとなりの白いのと列んで

首をそろへてあるさまはつてゐるのであつた
そして白いの自由になつて
それでよろこんで
何處でもみあたり次第に
おつ伏せられてゐるのであつた
そればかりか
たうとうその牝鶏らは
卵もとなりで生むし
寝るのもとなりのとやでねるやうになつた
それが知れると

意地悪婆さんはもうきがきでなかつた
さつそく町へでていつて
一はの雄鶏を買つてきた
それはまだ牝鶏のまへにでると小さくなつてゐるやうな
ひよつこであつた
牝鶏のまへですらさうだつたから
となりの白をみるときなどは
遠くから
ものかげから
いつもおそるおそるそのめつきを窺ひ
のびはじまつた尾をだらりと垂れて

やつとつくりはじめたそのときも
翼を鳴らしてたかだかとはたてえなかつた
そんなひよつこであつた

肺病やみの家の白いのは
まるで王様のやうであつた
霜ふりいろのひよつこはときどき
その王様にみつかつて
酷いひどい目にあつた
それでよくちんばをひいてはあるいてゐた
それでよくちひかけられて逃げまはつてゐた

牝鶏はそれを見ても
平氣で餌をひろつてゐた
みむきさえしなかつた
そしてあひかはらず自分のとやも
自分の家の霜ふりいろのひよつこもかへりみないで
となりのとばかりあそんでゐた

けれど「時」はやつてきた
十日二十日とさうしてゐるうちに
ひよつこはだんだん大きくなつた
そして強くなつてきた

もう雛鶏ではなくなつてきた

時々めんどりにをかしな素振を見せるやうになり

たかだかと翼をならして鳴くやうになつた

そこらに白いのがゐてもすこしも怖れないやうになつた

かへつてあちらでだんだん遠ざかつた

そうなる

牝鶏も牝鶏で

あまりとなりへ行かなくなり

家の若いそのげんきのいい雄鶏とならんであるくやうになつた

隣りの白めはもうたまらなかつた

いままで自分が自由にしてゐたものには逃げられる

自分の世界はせまくなる

一方が日一日といきほひよくなるにひきかへて

自分はそれとはあべこべになる

もう霜ふりいろのその軽蔑

おい、おいぼれ

どうしたい

どこかみえねえところへいつてろよ

眼ざわりでいけねえ

こんなめつきをみると

なんといつてもそのかんにんぶくろをやぶらずにはゐられなかつた

そして氣でも狂つたやうに

霜ふりいろをめぐけて飛びかかつた

だが霜ふりいろはせせらわらうやうな身振をして

二ど三どあいての白に羽搏かせた

而もそれはまるでくすぐられでもするやうであつた

白はすこし力づいてきた

これなら蹴殺すことができるかも知れない

すると霜ふりいろが身を縮めた

ばさり

その音は鋭かつた

それは縮めたからだが飛びあがつたとおもふよりはやかかつた

け、け、け、け

めのくらんだ白はぐるぐるるとめんどまはりをした

それでもたふれはしなかつた

やつとのことで

自分の家のべんじよのうしろまでにげてきて

そこの堆藁の中にふかぶかと首をつツこんだ

霜ふりいろはそれを追っかけはしなかつた

そんなことがいくどかあつた

またしても

けふそれであつた

それがあたしを頬笑ませたのだ
だがけふは霜ふりの奴
よくよく腹がたつたとみえて
いのちからがらにげてゆく白めのあとを
わきめもふらず
矢のやうになつておひかけた

朝からの糠雨は

じめじめと

なかなかやみさうにもなかつた
あたしは藤椅子の上で

あふむけになつて
ふたたび本をとりあげた

それからすこしたつた
二どめにわたしが窓硝子ごしにみたときには
もうみな一しよになつて
花のさいてる桐の木のしたの葱畑で
みなむつまじくあそんでゐた
そしてとなりの奴はづうづうしくもそこで
その霜ふりいろのめのまへで
その霜ふりいろのめんどりをお伏せたりしてゐた

家常茶飯詩

よあけは

遠い天そらのはてより

そして朝は

まだ、うすぐらいだいどころ厨所の

米を研ぐおとよりはじまる

おはやう

おはやう

なんとといふきま純らかな挨拶

それがいたるところで

とりかはされる

一日のはじまりである

○

大風の中で

子どもがあそんでゐる

戦争遊いくさあそび戯だ

犬の馬

ぼうきれの鐵砲

紙の旗があちらこちらにひらひらしてゐる

風がはげしくなればなるほど
いよいよその騒ぎが大きくなる
まるで風と
なかよくあそんでゐるやうだ
ごおつと風が襲ひかかると
子どもたちは
わあつと聲をはりあげて
枯葉のやうにはらばら駆けだす
雀らもそれにまぢつてうれしさうだ
それにまた
木々までが聲をあはせる

木々も一しよになつてゐるのだ

○

一日中

ふいて、ふいて

ふきぬいて

風はやんだ

冬の夜天はいら

おう、星、星、星

穀粒でもばらまいたやうなあ
の星は
どれも

これも

一つ一つみんな凍えてゐるやうだ
どうみてもそうみえてならない
だが、それでいい

おう、星、星

睫毛のうへできらきらしてゐる

ゆめのやうな

現実のやうな

それは

なんといつても貧乏人のものか

○

炬燵のうへには

おはぢきや

繪雑誌がちらばつてゐる

いままで

卓上ピアノをひいてあそんでゐたつけが

あそびつかれた子ども達は

もういつのまにか

ひつくりかへつてねむつてゐる

妻は、その子ども達の

ぼろ足袋をつくるひながら呟語く

(どうしませう)

これなんですもの

まるで鉋でもかけるやうなんです)

(うむ)

だが、それほど健康なんだ

ありがたいことではないか

ほんとに

健康なのばかりが

千軍萬馬にもまさる味方だ

妻はまた言ふ

(まつたくたまつたものぢやありません)

それこそ鑄でもこしらへたのでなくつちや——)

自分ももうやつと耳の孔をあけてゐるのだ

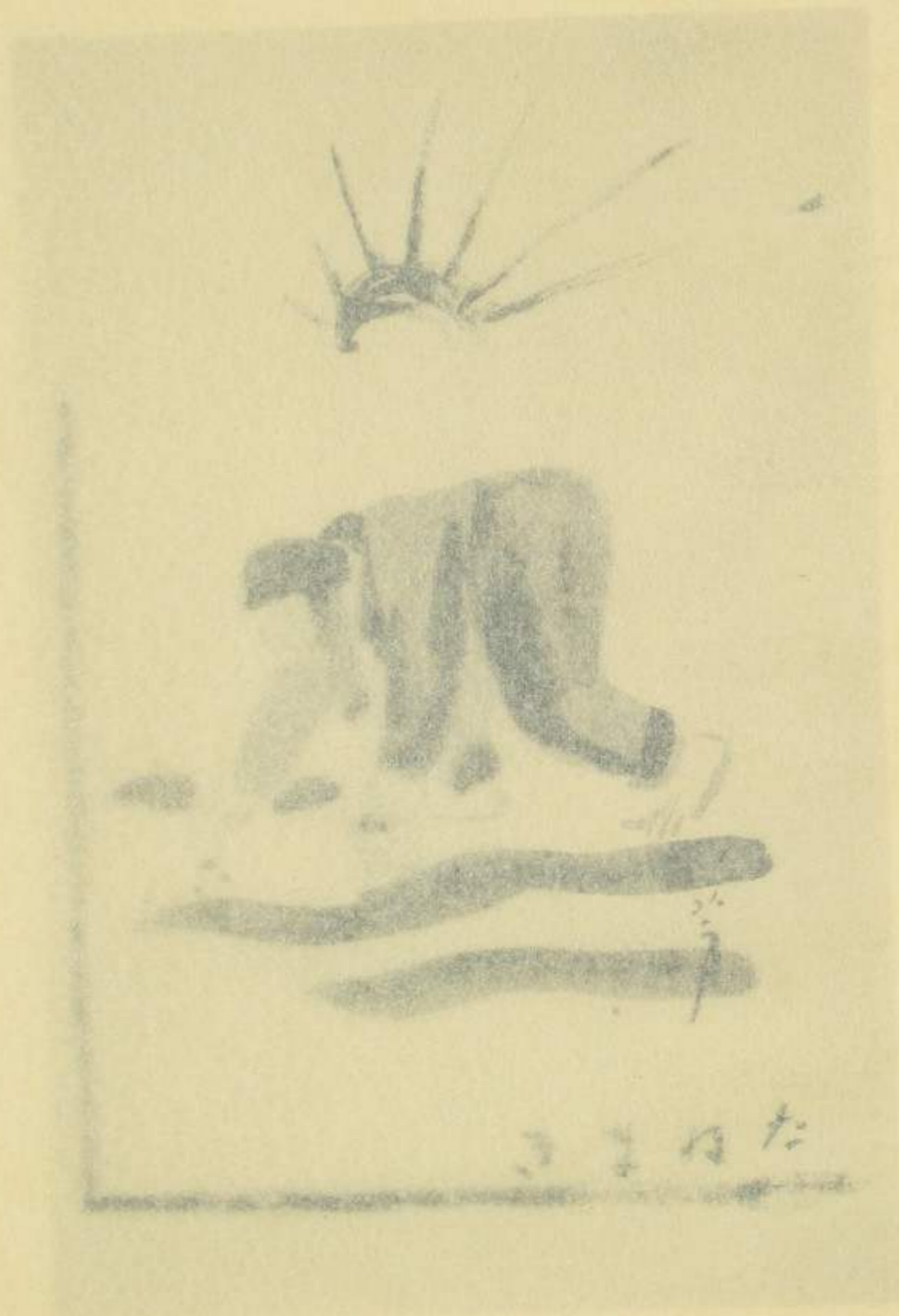
(うむ、こんどは

そんなのを買つて来てやらうよ)

ああ、ねむい

睡いのはとろけるやうだ

なにもものもそれをささえる力が無い



風捕り

風とはどんなものか

風を知らないひとたちがあるそうだ

それもすこしばかりではなく

たくさんにあるさうだ

そうしたひとたちは

自分のからだに風を見ても

なんともおもはないであらうか

風捕り

風とはどんなものか

風を知らないひとたちがあるそうだ

それもすこしばかりではなく

たくさんにあるさうだ

そうしたひとたちは

自分のからだに風を見ても

なんともおもはないであらうか



それを風と知つたらばどうするだらうか

それを風と知つたらば

どんなに赤い顔をするだらう

そしてひとびとのまへでは

爪でふつりと

押潰すこともできないで

どんなに慄毛をよ立てるだらう

自分達の家庭では

これまで、風といふ奴が

きはめてめづらしいものであつた

それが此の漁村にすむやうになつてから
そして近所の子どもたちが
家へあそびにくるやうになつてから
いつとなく、家の子どもたちの頭や肌着で
その蟲が

いかにしばしば^{みっけ}発見られたか
はじめはかなりびつくりしたり
また無氣味にもおもつたりしたが
いまではもう慣れて
それほどにも感じなくなつてしまつた

冬が來ると

そこでもここでも虱捕りがはじまる

ほかほかと湯氣でもたてさうな日向で
妻は

そこらのひとたちがやつてるやうに
よく子どもたちのあたまを膝の上にのせては
そこで小さな蟲をさがしてゐる
それをみると自分はいつでも
動物園の猿をおもひだす

妻はいふ

(まあ、このきささを御覧なさい

どうしたらいいでせう

いつこんなに殖えたんでせう)

自分ものぞいてみた

そしてさすがにおどろいた

(だが美事に生みつけたものじゃないか)

薬店できいたり

新聞でみたりして

あらゆることをやつてみたが、なんとしても

その小さな蟲の

不思議なほど強い生の力には

どうしても勝てなかつた

それもだめ

これもだめ

何一つとしてやくにたつたことは無かつた

またしても妻はいふ

(どうしたらいいでせう、ねえ)

自分はあきれてだまつてゐた

妻はたうとうおもひ決して

そのびつちりについてゐる子どもの頭の

無数の、きさをぬきはじめてた

それこそ、それをかぞへうるのはただ

全智全能の神ばかりだといふそのかずかぎりない髪の毛

その髪の毛を雑草でもかきわけるやうにして

そのほそいかすかな一すぢ一すぢから

爪さきに熱心と愛とをこめてぬきはじめてた

その砂でもふりかけたやうな蟲の卵を

一粒づつ

一粒づつと

ああ、貧乏に湧くものよ

母と子のその本能的な情意は

おまへらのやうな小さな汚い蟲の關係においてさえ

かうしてあきらかにみせられるものだが

それはまた何といふ美しさだらう

それを色彩や線條であらはずとすれば

まさに

聖畫の一つだ

冬が来ると

いたるところで風捕りがはじまる

聖母子像

日あたりで

うれしさうな

聖母達

どつちの膝の上にも

すやすやと

ねむつてゐる

小さないきもの

どれもこれも

蟹のやうな

猿のやうな

そんな顔

よくもまあ

こんな不緻縹にうまれたもんだ

そこへ

とほりかかった

これも聖母マドンナ

その脊の

銅羅のやうにわめく荷物を

おろしてやすむと

荷物は

すぐ木瘤のやうな

乳房にしがみついて

泣きやむ

三人は、それこそ

三羽の雀のやう

あかんぼたちは

母親そつくり、いきうつし

だがそれでいいのだ

それだからいいのだ

おう、聖母マドンナよ

あかんぼたちよ

實にいい

紙鳶

紙鳶はみんな

どの子どものもみんな

あるだけのいとがのばされ

その糸のさきで

たかく

ちいさい

けれどゆつたりとした長い尻尾だ

みんなもう天風てんかぜについてゐるのだらう

よう

ここまであがつて

来てみな

とでも言つてゐるやうにみえる

紙鳶になれたらどんなだらう

いや、いや

どの子どもたちも

みんな銘々

自分々々の紙鳶になつてゐるのだ

一鉢の花

自分は一鉢の花を買つた

それは春さきの

また東京下りのものとして

自分達貧乏人にとつては

それこそ眼球も飛びだすばかり

それほど高價なふりぢやであつた

けれど

自分は一め見ただけで

すつかりとほれこんでしまつた

そしてなけなしの錢で

それは米にも味噌にもなるのであつた錢で

花屋の手から買ひとつた

自分はうれしさにそれをかかえてどこをどうあるさまはつたものか

そのうちぼつぽつ雨が落ちてきた

やあ、花が濡れる

蝙蝠傘ももたなかつた自分は身もつて

それをいたはりおほひかばつた

雨は次第につよくなつた

それにまた風さえはげしく加はつた

自分はもういつか自分をまつたくどこにかなくしてゐた

その一鉢の花のために

家に歸つてから

これは氣のついたことであつたが

自分はまあ、かつて自分の眞實の妻や子どもたちに対してすら

これほど情熱的なことがあつたか

でもそのときの自分は

その花のために

なんといふ想像も及ばないくるしみをしたことだらう

とはいへ、そうしてくるしめばくるしむほど

その花がいよいよ可愛く美しく

もうもう、どんなものにもかへられないと

命に賭けても愛さずにはゐられなかつた

春

とある洋品店の

華かな飾窓のところに

うつくしい飾り人形がしよんぼりと立つてゐた

そのけばけばしさつたらなかつた

自分が俵の上からふりかへると

その人形がにっこりとした

二ど目にみたときには

もう、くるりとあちらをむいてゐた

自分は大口をあけてからからと笑ふこともできなかつた

それが、まあ、どうだい

動きだしたんだ

遠くからくる若い男をみつけて

その方へ

而も駆けださないばかりに

季節をつげる漁婦達

はるだ

はるだ

なんといつても

もうはるだ

萬物の季節だ

まだ波はたかいけれど

もつともつとこれより

いくばいもいくばいもたかかつた

あのなみのそこから

そのとほくから

春は

いつのまにか

渚近くおくられて来てゐた

御覽、このみどりのうつくしい

いさいさとよみがへつたいのちのいろ

なめらかな磯岩の肌を

汐のひきさしに

ちらちらみえるその肌を

御覽、これがあのおそろしい

あれくるふなみとたたかひ

なみをかみ

よるとなく

またひるとなく

険惡な空をにらみつけ

それこそけだもののむれのやうに

山々に反響する

あの咆哮をつづけてゐた磯岩だらうか

あの黒々とまるで鐵糞の塊のやうにみえてゐた磯岩だらうか

おほきな磯岩

ちひさな磯岩

海底ふかくかくれてゐるもの

頭をちよつぴりだしてゐるもの

そこく

蟹、貝、えび、たこ、雜魚らの善い巢だ

いくつもいくつもある

たくさんの

どれもこれもおほかた

それぞれの名まへをもつてゐる磯岩

遠いとほい

だれもしらないおほむかしからの

ふるいふるい名まへを

一つづつもつてゐる磯岩

はるだ

はるだ

萬物の季節だ

なんといつても

もう春だ

ああ、そのはるが

磯岩にもかうしてきたのだ

いや、そこからして此の世のはるははじまるといふものだ

御覧、くると白いお唇をむきだし

なみの飛沫に

そのお唇までぬらして

その磯岩のあひだをあちこちと

女房達があさりめぐつてゐるではないか
海苔をとり

また鬚ほどの

松藻を採つてゐるのだ

おうい、漁夫の女房達よ

おまへたちこそ

自分達貧乏人のあひだにあつては

ほんとはるのさきがけの

季節をつげる

海のをんなの神様なんだ

ある時

——家常茶飯詩

ふじ子よ

生きてゐるといふことは

どうしてかうもさびしいのだらう

と言つて自分には

それがどうしやうもないのだ

おまへもさうか

自分はいつか町裏の

あの麥ばたけの高堂から

河向ふの

たんぼなかの

電車をながめてゐたことがあつた

あのおもちやのやうな電車を

ぽつぽつと

豆粒でもならべたように

すこしづつあひだをおいてきらきらしてゐる電球のしたを

電車はうつくしく

音もなくはしつていつた

あれは寒い暮れがたであつた

そのとき自分は

あのなかにつてゐるひとのことをおもつてゐたつけ

あのなかにはさまざまのひとがゐたにちがひない

それこそ泣いてもたりないやうな

そんなかなしみをもつたひとも

また自分のやうに寂しいひとも

けれどあの電車は

なんといふ美しさで

幸福さうにはしつてゐたらう

あの電車でも、また

見にゆかうかと自分はおもふ

父に書きおくる

父よ、こんやは節分で

あちらでもこちらでも

にぎやかな豆撒きの聲がします

ふくはうち

おにはそと

父よ、あなたもそのふるさとで

弓なりの腰をのばしながら

その齒のない口で

こんやもまたいつものやうにそれを吐鳴つてゐるのでせう

近所でのその聲をきくと

わたしには子どもの頃のことがおもひだされてなりません

わたしはこのごろまたからだのぐあいがよくないのです

それで寝たりおきたりしてゐます

まだ暮れたばかりですけれど

すこしつかれてきましたから

これからまた褥とこに這入らうとしてゐます

そのまへに一ど

せめてものころやりに

そちらの空でもながめやうとおもつて

椽側にでてみました

まあ、この綺麗な

それこそ天でも豆撒きをしたやうなこの星、星、星

遠いふるさとでの

あなたの聲までがきこへるやうです

ふくはうち

おにはそと

めにみえない鬼にむかつて

ばらばらとなげつけられる煎豆の粒々

妹のあかんぼ——あなたの孫がその昔のあたしのやうに

あなたのあとからよたよたと匍ひずりながら

その粒々を捨ひまはつてゐるでせう

そして頬張つたりしてゐるでせう

目にみえるやうです

それがすむと

こんどは豆木の殻がもやされ

爐では鯛のあたまがじくじくと焼かれるのでせう

あなたが眞面目腐つた顔をして

ベツベツとその鯛のあたまに唾を吐きかけながら

喋舌つてゐるのを

あたしは噴きだしたいやうな氣持でさいてゐました

よくおぼえてゐます

何はさておき

百姓のことだから

まづ米麥の蟲を焼く、ベツベツ

それから粟、蕎麥、陸稻、もろこしの蟲をやく、ベツベツ

野菜、青物、なりくだもの

養蠶につく蟲、桑の蟲

そのほかすべてのものにつく悪い蟲をやく、ペッペッ
さまさまの兇禍を焼く

家につくもの

家の人達につくもの

わけても子どもにつきたがるその病氣の蟲を焼く、ペッペッ

父よ、あなたはさうして年毎に

わたしの運命の悪い蟲までもやいてくださつたのですが

どうしたものでせう

それは焼きつくされなかつたと見えます

それはそれとして

またしても近所からさかんにきこえてきます

ふくはうち

おにはそと

なんにも知らない家のこどもは

それを不思議さうにたづねるのです

だが、なんとはなしたものでせう

と言つてまさか知らないとも偽れないので

その出鱈目のやうな話をはなしてきかすと

子どもたちは繪雑誌などでみてゐたのをおもひだして

すぐそれを信ずるのです

そして、家でも豆撒きをしておくれと駄々を控ねるのです

ああ、たまらない

子どもの無邪気さには打たれます

その正直さには打たれます

子どもたちはもう

鬼のゐることをちつともうたがってはゐないのです

みたこともないものです

けれど子どもたちは

それだからなほさら強く信ずるのです

迷信であつてもかまひません

ほんとにこんな單純な氣持になりたいものだ

泌々わたしはおもひます

でも、もうだめです

わたしらには鬼があんまりおほく居過ぎます

父よ、鬼はほんとうにゐるのだといまはじめて知りました

わたしは自分のところに

それをいくらでもみることができます

また、そのおそろしい角を

自分のこの額ひたへに感ずることすらあります

父よ、もうしかたがありません

わたしたちにはなんとしても

ふくはうち

おにはそと

さういつて吐鳴りまはることができません
できなくなつてしまつたのです

父よ、だから、もしできることなら

これは冗談口のやうにも聞こえますが

こんやのやうに家々から追ひだされたら

その鬼どものために

わたしたちはせめてもの

善い巢にでもなつてやるほかありません

わたしがさう子ども達に話すと

子どもたちも怖々ながらではありましたが

口を揃へていひました

それがいい

そうして可愛がつてやれば

きつと悪いことなんかしませんよ

悪いことなんかするのを

恥しいとおもうやうになります

ゆふがた

ゆふがた

庭さを掃除してゐると

そこへはるばる木の葉のやうな

葉書が二枚まひこんできた

二枚とも、まあ

むかしのむかしのをんなからで

その一つにはかうあつた

めつきり寒くなりました

此頃おからだはいかがですか

私はもうとても長いことはありますまい

も一つには

かうしていつもいつも

酷い貧乏ばかりしてをりますが

そんな中でも子どもだけは

なんともいへず

かあいくかあいくそだちます

自分は無心で

とつぷりと暮れた頭のうへをしづかにみあげた
けれどどんよりした天は
いまにも雪でもおとしさうな
おう、星よ
自分は一體どうすればよいのか
せめてはおまへだけでも
この切なさをわかつておくれ

鱧に

日あたりに
頭だけずらりと列べ
おもひおもひに寝轉がされてゐる鱧よ
そしてほしつけられる鱧よ
そんなにはつちりあけてゐながら
おまへたちの目にはもうなんにもうつらないのか
まだ、どんなものでもはつきりとみえるやうではないか

これが蒼々としたあの大海の中で
びちびちはねてゐるときであつたら
わたしらをみたら
みるよりはやく
すぐ藻か磯岩のかげにひらりとかくれてもしまふだらうに

鯧よ

鯧よ

おまへたちはもうなんといつても此の世のものではないのだ
だがおまへたちだつて生きものであつたからには
やつぱり、わたしら人間の或るもののやうに

來世とか天國とかいふやうなことを信じてゐたかもしれぬ
そんなことがあるものかと誰に言へやう
それともそんなことには一切頓着なく
ただもう生きてゐることだけを
ただそれだけをたのしんでゐたか
何はともあれ
おまへたち魚類にとつては
網や釣で
その大海からひきあげられるほど
それほどおそろしいことはないのだ
だからといつて、いまさら

漁夫達をうらんでもゐないだらう

うらんだつてどうなるものか

彼等だつて

殺生はしたくないんだ

だが彼等とてくらしをたててゆかねばならない

妻や子どもやとしよりたちをやしなはねばならない

それには自分の小さい時から

ならひおぼえたその仕事で

その日その日の稼ぎをするほかないではないか

おう、出刃庖丁で鱗をひかれ

腸をむしりとられて

ぼつかり口をあけてゐるもの

または、それをばかたく食ひしばつてゐるもの

自分はそこに

おまへたち銘々の

その斷末魔のくるしかつたおもひを見る

はるだ

はるだ

わけてもけふはからりと風ぎた

それはそれはいい日だ

遠いとほい汐鳴りまでがいかにものんびりと
ここまでその静かさをおくつてくる

ああ、鱧よ、おまへたちも

ゆふべまでは

あそこに、たのしく、たのしく
みんなと一しよに泳ぎまはつてゐたのであつたな
も一とおまへたちにきかせたいものだとおもふ
あのとろりとろりと
くすぐるやうにくづれる波の音を
あの氣味悪いほどなめらかな

まるでべらべら舐めずるやうな
麗かな海のささやきを

鱧よ、鱧よ

おまへら魚類は死んでも
そして日向で干しつけられても
どうしても目だけはぱつちりとつぶらないの
そうだらう
そうだらう
それほど生きてゐたいんだな
それが自分にもわかるやうな氣がする

自分はよく知つてゐる

自分はよく知つてゐる

冬につづいてくるその季節を

雪がきえると

すぐ春になることを

そこでは萬物が

まるで花嫁のやうにみづからを着飾るのだ

どんなものでも、みんな

それこそ塵埃こみのやうな蟲けらのその一びき一びきまでが

そしておたがひにうれしくたのしく

うたつたり

踊つたりするのだ

自分はよく知つてゐる

それなのに、ああ、それなのに……

時計

ちろちろと

ランプはうすぐらく

そしてはかないおもひにもえてゐる

ちろちろと

さびしいランプだ

なんといふしづかなばんだらう

ゆきにでもなつたかしら

なんといふしづかさだらう

ちいッく たあッく

ちいッく たあッく

ねぢのゆるんだはしらどけいのセコンドをさいてゐると

とろとろとねむくなる

とろとろと

いまにもとろけさうなめではあるが

とけいのおもての

アラビヤすうじと

二ほんのはりとはまだみえる

だが、はりはいつうごくのだらう

ひつそりとただひとつところをさしてゐるにすぎない

ランプはうすぐらく

ちろちろと

そしてはかないおもひにもえてゐる

ちようどわたしのやうだ

ちいづく たあつく

ちいづく たあつく
かうしてきそくただしく
ひとときのやすみもなく

ねんがらねんぢう

それこそよるひるうごきどほしでは

いくらきかいだつて

どんなにかつかれるだらう

それよりも

どんなにあきあきするだらう

そらいへばほんとにけだるいセコンドのおとだ

ああ、とけいだつてかわいさうだ
ちよつとてをのばして
とめて

ゆつくりやすませてやらうか

黒い土

ふかいふかい松林の中に

一寸ぢの細徑がある

その徑のほとり

けふ、そこをとほると

その棘や籐竹のおひしげつてゐたところが

壘二三枚ほど削られ

そこに

一つの窓ができてゐた

自分の脚はびたりととまつた

自分は地面の

その窓にひきつけられて

しみじみとそれをながめた

まあ、なんといふ黒い土だらう

それからまたその沃えやうは

むつちりと

ゑみさけるばかりにもりあがり

もりあがつたところは、それこそ

健康な處女の裸のからだでもみるやうである

むつちりと

そして黒い天鵞絨の肌

匂ひもつよく、かつ深く

その眞實をこめた新鮮さは

清酒のやうにも自分のまなこに滲むのである

自分の、このつかれおとろへたまなこに

これでも土は生きてゐないか

雪に埋もれて

ながいあひだかくれてゐたのだ

それがいま春となり

その雪があとかたもなくなつたので

かうして自分の目についたのだ

おう、まだ人間の感觸をしらない

日光をちらりと一どうけたことさへない

大地の窓よ

自分はまだあまりのうれしさに掌をあててみずにはゐられなかつた

その土に

その土に

もしや大地の脈膊でも感じうるかと

おう、土よ、生けるものよ

その黒さに太古のかほりがただよつてゐる

その一つの窓によつて

自分は大地を信ずるのだ

自分達人間のひとときも離れられないその大地を

自分はいま

その内部の永遠なるものに

かく、うまれてはじめて嬰兒のやうに接觸した

自分がみたのは
ほんとの、ほんとの土である
その中に
どんな種子でもおろしてみろ

自分はあまりのうれしさに
さらに母の乳房をでもひつつかむやうに一握り
一口頬ばつてみたらば、と
その土を掴んだ

だが、それは頬ばり貪るにすら
あまりにあまりに勿體なすぎるではないか





自分がみたのは
ほんとの、ほんとの土である
その中に

どんな種子でもおろしてみろ

自分はいあまりのうれしさに

さらに母の乳房をでもひつつかむやうに一握り

一口頬ばつてみたらば、と

その土を掴んだ

だが、それは頬ばり食べるにすら

あまりにあまりに勿體なすぎるではないか

自分は土の靈に憑かれた

自分はそれをつかんだまま

ふかいふかい松林の中のそのほそい寂しい一すぢの徑を

どこまでもどこまでもあるいて行つた

うれしさに

大地の窓、ほんとのほんとの土をみたそのうれしさに駆けだし

ときどきは大聲をはりあげ

また、翼もないのに天たかく舞ひあがらうとさへしなから

雪景

雪

雪はうつくしい

けれどうつくしいなどと

いつてゐられるうちは

まだいいのだ

大雪の翌日であつた

自分がそれをみたのは

その小屋のかげで

びたりとよりそつてゐた

よぼよぼの乞食夫婦を

その婆さんのはうは盲者めくらであつた

大雪の翌日であつた

自分がそれをみたのは

そこで

かわるがわる一本の煙管が

くちからくちへと

いつたりきたり

さも美味さうにすばすばと吸はれては
紫色のうすいけむりをあげてゐたのを

ふたりはその日溜りで
日向ぼつこをしてゐたのだ

雪

雪はうつくしい
けれどうつくしいなどと
いつてゐられるうちは
まだいいのだ

それでもなんでも
雪はうつくしい
雪によつて
すべてのものがうつくしいのだ

おう、あのみすぼらしい乞食小屋をとりまいて
此の世のすべてのいきものの
生くるにまつはる惨めさがあつた
そのひとところに
だが、またそこに

そのみぢめさに
ありとあらゆる美があつた

虹

—夢二兄におくる

虹を

一ばんさきに見つけたのは
なんといつても
子ども達だ

子どもはいふ

虹、虹、大きいな

だがかうして私が手をひろげると

あれよりもつともつと大きい

虹は

この中にはいつてしまふ

それをきくと

その母もまただまつてはゐない

まあ、なんて綺麗なんでせう

まるでみぢんこでもこしらへたお菓子のやうにみえる

拜みたいやうね

あんなのをみてゐると

此處もまたお伽噺の國ですわねえ

いまさらのやうに

その壯大なる一瞬間の天景にうたれた自分は

あまりのうれしさに

小便を

地に垂れずにはゐられなかつた

ふたたびみたときには

もう、さすがの虹も

ぼんやりと
うすれはじめた

ぼんやりと

そのてつべんのはうから

虹はうすれた

ちやうど自分のそのうつくしいすがたを
わたしたちにちらりとみせて

それでもう役がすんだといふやうに

だが、子ども達は

それをみると

腹を立ててどなりちらした

私達のみつけた虹だ

父ちゃんが

小便なんかひつかけたからだ

そして嘔鳴つてやめなかつた

星を聴く

—芋錢晝聖におくる

頭痛がするからと

早寝をした妻

それをみると子ども達は

とりのこされた寂しさと腹立たしさで

すねくれださずにはゐなかつた

だが、みむいてももらへず

たうとうこちらから折れて

そのかたはらに

ごろり、ごろりと

小さな南瓜のやうな頭を二つならべてすぐ寝轉んだ

子ども達がひつそりと

ねむつてしまふと

そのとき自分の認めてゐた借錢證書のうへに

ばらばら星が落ちはじめた

ほんとにひさしぶりだ

ひさしぶりで聴く夜ふけてのこの音のいらこと

愛のつぶつぶ

そのつぶつぶのさよらかさ

そのつぶつぶのしとやかさ

そのつぶつぶのしづかさ

それでゐて、また

肩の翼をひらひらと

あのラフワエロの描いたかわいい天の使の

たわむれてでもゐるやうな快活さ

星はぱらぱらと

まるでたねまきでもするやうに

屋根屋根の上

かうしてなんにもしらずにねむつてゐるものの上

また、ひとりしよんぼりと

めざめてゐるものの上に

ぱら ぱら

ぱら ぱら

自分にあえて雨とはいふまゝ

それにしてはあまりに此の世のものではないから

麥島にて

自分は郊外の

海のやうな麥島にたつた

麥島は

霜でまつ白だつた

だれもゐなかつた

あかんぼのような太陽が中天ににこにこしてゐた
それだけ

自分はふいと祈りたくなつた

大聲をあげて

自分のところに

つもりつもつたそのすべてを

そこへ

そのまつ白な霜のうへに

まるで血嘔吐へどでもぶちまけるやうに

だがいのとすれば

ななに、だれに

自分にはもう

それをささげる神もないのだ

ああ、それはそれとして

これはなんといふうつくしい麥島だらう

自分はじつとしてゐられないで

自分はいのるかほりに

そうだ、一びきの犬ころのやうに

そこらいつばい

縦横無盡に駆けまはつた

母

國から母がでかけてきた

やつとのことできたのだ

母はもう、いつ眠つたぎりになるかわからないほどの齡

そんなよぼよぼのお^{ばあ}さんだ

ひさしぶりであつたうれしさ

自分達がなつかしくはなしかけても耳が遠く

だから氣持が溶けあはないで
ぽかんとおほかたひとりぼっち
それだからとて
あえて寂しいとおもふでもない

自分達がめづらしいものをあれこれとさがしまはつて
それを食卓にのせてあげても
咽喉にはとほすが
とりわけ、これはうまいと舌も鳴らさず
やつぱり喰べ馴れた自分のはたけの
お芋か大根がいいような顔をしてゐる

それなら何處か
見物にでもつれてゆかうとさそつても
いやはや、景色のなんのといつてさわぐのは若い時分のことさ
それよりはかうして足でも伸ばしてゐるほうが
どれほどありがたいか知れないと言ふ

母はかうして一日二日

おそらくうまれてはじめてのやうに縁側の目あたり
あるひは炬燵の附近などでぶらぶらしてゐたつげが
たうとうたまらなくなつたとみえて

はるばるもつてきた

だいじなだいじなその合財囊がっさいぶくろを

自分の手もとにひきよせた

おや、何があんなにふつくりと一ぱいはいつてゐるのかとおもつたら

自分達はあいた口が塞がらなかつた

それこそ一抱きほどもある糸の屑ではなかつたか

150

まあ、そんなことをはじめないで

滅多に来るのでもないのに

せめて此處にゐるあひだぐらゐは暢氣に

ゆつくりとやすんだらどうです

としよつた母ははじめてにつこりと

あいよ、だかのう

わしにはなんにもしないで遊んでゐるほど

つらいつまらない退屈なことはないのさ

と云つて二寸三寸

稀には一尺ほどの糸の屑が

その老眼鏡のしたで一本一本と

干枯らびた

血の氣のない

まるで細い楮木でもへし折つてならべたような指尖でたんねんに

151

つつましくも繋ぎだされた

としよつた母はぶつとりともいはず
ちようどお祈りでもしてゐるやうに
すわりこんだらもう大磐石

此方から聲でもかけなければいつまでもいつまでも
それこそ腹の空いたのもしらず
日の暮れたのもしらないで

その仕事のために

自分自身をすらいつかどこへか
まつたくなくしてゐるのであつた

その糸をどうするのですと

自分達の目はみはられないではゐなかつた

え、かうしておけば

何にでもなるよ

これを織れば蒲團ふだんぎの皮にでも

またお前達の平常着ふだんぎにでも

幾日ぐらゐで繋ぎをへますか
そうなのう

とても人間一生の半分

そればかりにかかりきつたところで
一年二年ではやりきれないでせうね
そうなのう

そんなことはかんがえてみたこともないが
かなりひまのかかることだの

その糸屑はどこからもつてきたんですか
これかい

みんな若い時分から

丹精して棄てられるのをためてきたのさ

糸はかうして一本一本とつながれ
つながれたものは

そこで一つの球に捲かれた

時に、自分が押揃おそろつて

おつかさんは此の世へなんのために生れてこられたんです
すると眼鏡越しに

え、何か言つたかえ

自分のところはびんと眞面目に跳ねかへされ

そしても一ど

おつかさんは此の世へなんのために生れてこられたんです

皺くちやな澁紙色のその頬つぺたに

かすかな微笑の泛んだのは

問はれた意味がわかつたのか

もぐもぐ口が動いたとみると

わしは無學でなんにも知らないよ

だがそんなことはどうだつていいぢやないかえ

ただ、わしにはなんなりとして

一日だつて働かないではゐられないんだ

自分の頭かぶはうやうやしく低さがつた

おう、たふときものよ

あなたが自分の母上なのか

あなたから自分は世界にでてきたのか

あなたに、あなたに自分は天地創造の力と生とをみとめます

なんといふ平凡な

けれどこれほど偉大な言葉がどこにありませう

母上よ

わしにはなんなりとして

働かないではゐられないんだと言はれるあなただ

あなたは永遠に生きてゐられる

そのいのちにおいて

その無智において

その愛において

混乱に秩序をあたへる

あなたの指尖

あなたのその廢物利用は

まさに更生の奇蹟そのもの

いまはじめて、自分は一個の田舎媪さんのあなたにおいて
生ける神

神そのものの像をみました

おう、それにしてもこの一抱えの糸屑

それを一本一本と繋ぐこと

それがみよ

死の底なき淵をまのあたりにして

ひとりしよんぼりと

にんげんのいのちの最終の懸崖いまはにつつたつたものの仕事だとは

星天に讃す

まいばん、まいばん

くもつてさえぬければ

この星空だ

この星だ

頭顱あたまの上をみるがいい

めをあげて

ふりあふいで

泌々とみるがいい

誰の所有ものでもない

それでゐて

萬人のものである星……

無数の星はなにをかたるか

それよりも

なによりも

これはまあ黄金きんの穀粒こくりゅうでもばらまいたようではないか

ひとびとよ

これをおもへ

なんといふ天の黙示であらう

ひとびとよ

自分達は農夫として

ただ蒔きさえすればよいのではないか

まかないものが刈取れるか

まかないものは刈取つてはならない

ひとびとよ

それだのおほくものは

まきもしないでからうとするのだ

まかないものほど

よりおほく

刈らうとする

かへりみなければならない

この星をみよ

この星によつておもふがいら

かう蒔くのだ

かうまくだけでいいのだ

このひろびろとしてはてしなき大蒼穹
このうつくしい神の畑よ
そこにまかれた永遠の種子よ

このすばらしさにひざま跪座け
かうまくのだ
かうまくだけでいいのだ
ただまくだけでいいのだ

ひとびとよ
あたふたとかりとることばかり考えてゐてはならない

そんなことはわすれてしまへ
そしてただまくことだけをちもふがいに

まけ
まけ

ただまくことだ
さかんにまけ
だれもかれもみなはれやかなところをもつて
銘々のそのたましひの種子を蒔け

いのちの種子

のぞみの種子

愛の種子

縦横無盡にまくがい

そしてまいたら

そのあとは大地のふところにまかせるがい

太陽の光や雨にまかせるがい

166

收穫^{とりのいれ}などはおもはぬがい

まいてさえおけば

おのづからとりいれは來るのだ

ただまけばいい

まかぬところから

どうして、何があたへられるか

ただまけばいい

まいてさえおけばそれでいい

そのあとのすべてのことは見えない自然の手の仕業だ

167

ひとびとよ

だが、いかに自然のその不思議な力をもつてしても

まかれぬものは

どうしようもないのだ

各自はそこで

各自のその偉大なつとめをおもはねばならない
ひとびとよ

ここに萬物の始めがある

各自はそれをおもはねばならない
いや、そんなこともおもはぬがら

あう 地上の美よ

そして眞實よ

蒔かれるその一粒は

刈られるときの百粒である

愛よ

いのちよ

よろこびよ

すべては黄金の穀粒であれ

そしてまぐものは

ただまぐといふことをたのしめ

そこに生きよ

いかにも種子の

あるものは礫地に落ちよう

あるものは棘の中に

あるものは底深き水に

それだからとてまくことをやめてはならない

ひとびとよ

自分達のまいたものが

一粒残らず滅びうせてしまへばとて

みんな腐つて枯れてしまへばとて

やつぱり、それでもまかねばならない

まけ

まけ

まくことに生きよう

その他のことはおもひおこすな

ただまけ

星のような種子である

そしてそれをまくところは

かうして天空のようなうつくしい豊饒な大地の上である

ひとびとよ

まかれるときの一粒は

まことに、刈られるときの百粒である

一粒は一粒ではない
とはいへ

その一粒が地べたの中でくさらなければ
善い百粒はみられないのだ

そこに各自の寂しさがある
だがまた、よろこびもそこにあるのだ

それは穀粒のことだが

その種子をまくおたがひもおなじである

おなじではあつても

寂しいとつぶやいてはならない

その善い百粒のために

土深く

朽ちはてほろびる一粒をおもつて

おう 父なる太陽

そして母なる大地

ひとびとよ

自分達こそまことのまことの種子ではないのか

まけ

まけ

自分をまくのだ

新しい大きなものは明日である
しみじみと天高く
ひとびとよ

一日の仕事につかれた手足を

ながながとのべてやすらふにささだち
しまーど

黄金の穀粒をばらまいたような

その無言の

さんらんたるもの

かずかぎりなき星を仰いでみようではないか

田園風景

石つころを噛み噛み

がらがら、がらがら

がた馬車が

とほつていつたよ

がた馬車には

どこかのおばあさんと

その孫らしい
赤いてがらの娘つ子とが
のつてゐただよ

あんまりゆれるだで

二つの首が

ゆらりくらりと

まるで首ふり人形のようにであつたよ

なんといつてももう

あれでははなしどころか

くちをあけて

わらふことさえ

まんぞくにはできないだんべ

どつちをみても

ひろいひろいむぎはたけ麥圃と

あいかはらずの蒼空だ

それから

どこまでもどこまでもつづいてゐる

このでこぼこの

すなつぽこりの

曲りくねつた一本の田舎道さ

なにかもみんな

どうせ、すぐまたぐつすりど

ねこんでしまふにきまつてゐるなあ

まあ、まあ

なんて美味うまさうな馬糞まぐそだんべ

ほかほかとけむりがたつて

それはさうと

がらがら、がらがら

石つころを噛み噛み

とほつていつたがた馬車は

おや、もうどこかへ

手品のように

みえなくなつてしまつたよう

庭の一隅

庭のひあたりはいら

なんといふ幸福さうな鶏だらう

そこらをおるさまはつて

餌をあさるやうにみせかけてゐるをんどりが

とさういふ

くすぐつたいやうな聲をだしては呼ぶ

こ、こ、こ、こ、こ

雌鶏はまたかといつたやうな恰好

だまされるのは百も承知で

それでもよばれたところへ駆けつけてみる

案の條、なんにもない

をんどりが趾や嘴でひつかきまはしたところをのぞいてみる

けれど穀粒一つあるもんか

うろろうしてゐると雄鶏の奴

いきなり翼を箕のやうにべろりとひろげて

ばさばさとわざとらしい音をさせ

子どもらがちやうど

ちんちんもがもがでもするやうな身振で

すりよつてきて

雌鶏からかを弄ふ

めんどりもまんざらいやでもないのだらう

さうされると

それでもそぶりばかりには

ひらりと横に飛びのいてみせる

さうしたときにはけつしておつぶせられないのを

よく知りぬいてゐるくせに——

庭のひあたりはいい

なんといふ幸福さうな鶏だらう——

春

酒樽おや樽、おほきいな

酒樽おや樽、からつぼだ

からりとはれた

蒼空の

そのしたで

ごろりごろりと

ころがるところは
どうみても生きてるやうだよ

あや、あや

これはどうしたもんだ

うようよたかつて

それをころがすにんげんが

けふは侏儒だ

みんな侏儒だ

雪について

朝

おきてみたら

おもひもかけない

雪、雪、雪

飛びだして朝餉もおもはず

凍けた手に

いさをふきかけ

いきをふきかけ

おほよろこびの子どもら

そしてたちまち消えてなくなる

雪だるまをこしらへる

雪兎をこしらへる

妻よ

自分達も子どもにかへつて

どうだい、何か

神様でもこしらへてみようではないか

×

妻はいふ

——雪つて

なんといふ温かで

幸福さうなものなんでせう

×

子どもたちは

自分でこしらへた雪だるまに

小さな掌をあはせて

それを

おもしろがつて禮拜をがんだ

学校からかへるまで

きえないでゐておくれ、と

自分達もそのねがひが

どんなにかなへてやりたかつたか

おう、いまはあとかたもなきもの

その雪だるまよ

わが子の落膽をおもひうかべながら

まごまごとめのまへで

おまへに痩せられ

とろけてゆかれるそれをみるのは

なんとしてもたまらなかつた

けれどどうしようもなかつた

それはあまりに麗い日であつた

雪景

しとしと

雪のふるなか

そのなかをかけめぐり

かけめぐる子どもら

林檎のような赤い頬つぺたの健康さ

くちぐちにうちだす小銃の音

雪つぶての砲弾

とん、とん、ととん

おひかけるもの

逃げまどふもの

とんとん、とんとん、とん

泣く弱蟲にはめもくれるな

真剣な子どもら

ホオマーのイリアッドからでも

おどりだしてきたような勇者

英雄ぞろひ

しとしとと雪のふるなか

雪だらけ



まるで繪にみる
子どもらの戦争ごっこ



まるで繪にみる
子どもらの戦争ごっこ

冬

冬のよふけは

凄^しいほど静^し穏^かだ

なにかが

みんな凍^しみついてしまつたようだ

本を讀んでゐると

遠くの方がひとところ

馬鹿にぎやかになりだした

なんたらう

いまごろ

縁側にててみると

あんまりしづかなよふけなので

そこだけがぼつちりと明るく

まるで大きな牡丹でもさいているようにおもはれる

喧嘩ぢやありませんかと妻

無理はないよ

なんといつてもこの寒気だもの

鴉

鴉がないてゐる

聲を囁らしてないてゐる

枯木のでつぺんにとまつてさ

それを　びゅびゅ

ふき曝してゐる霽風め

だが鴉よ

なんだってそんなに

くやしさをなしてゐるんだよ
まつ赤な夕日に腹をたてて
何か悪態でもついてゐるんか

走馬燈

ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる

——走馬燈がまはりはじめた

ぐるぐる
ぐるぐる

ゐなかのおぢさん

だいな、だいな

帽子あつぽを風めに

ふきとばされたよ

さあ、たいへん

ぐるぐる

ぐるぐる

ぐるぐる
ぐるぐる

ゐなかのおぢさん

くるりとまわった

お臂がまわつくるけだ

鍋底みたいだ

すたこら、すたこら

ぐるぐる

ぐるぐる

あうい、あうい

あいらのちやつぽだ

だいなちやつぽだ

けえしてくんろよ

すたこら、すたこら

ぐるぐる

ぐるぐる

それでも風めは

へんじもしなけりや

みむきもしないで

とつとと逃げてく

どうしたもんだべ

ぐるぐる

ぐるぐる

ぐるぐる

ぐるぐる

ぬなかのおぢさん

あんまり

心配しないがよかんべ
鴉が笑つてら

ばかあ、ばかあ

ぐるぐる

ぐるぐる

と云つてちやつぽが
けえつてこねえだら
それこそ

嬢でっどんの大かいち目玉

どうしたもんだべ

ぐるぐる

ぐるぐる

いたずら風めは

浮氣な奴だで

ちよいとだまして

つれてはゆくけど

すぐまた捨てるよ

ぐるぐる
ぐるぐる

それではちやつぽは

風めの野郎と

逃げてつたんかい

そうとはしらなかつた

ああん、ああん

ぐるぐる
ぐるぐる

ゐなかのおぢさん
泣きながらおつかけた
おつけながら泣いた
なんちうせわしいことだかな

ああん、ああん

ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる

ぐるぐる
ぐるぐる

たうとうそれでも
ふん捕まへたよ
ふんづかまへたが
帽子はびしよぬれ
どうしたもんだべ

それもそのはづ

溝渠どぶがあつたので
飛び越えやうとした時
どうしたはづみか
ばつたりおつこつただ
ぐるぐる
ぐるぐる

風めは薄情で
それをみるなり
どこへか行つちやつた

薄情でなくとも

どうしやうもないのだ

ぐるぐる

ぐるぐる

ゐなかのおぢさん

びしよぬれちやつぽを

頭蓋あたまのてつぺんさ

ちよこんとのつけて

にここにここにこ

そして言ふのさ

(これも親爺の

ゆづりのちやつぽだ

親爺の頭は

ほんとにでかかつた

おいらがかぶると

すぼりと肩まで

はいつてしまふだ

それを智慧者のうちの嬢どんが

新聞紙まるめて

つッこんでくれただ
いまもいとて
ぬれてはゐるけん
かうしてかぶつてゐるまに乾くと
もともとどほりの
立派なちやつぽだ
それにつけても風の野郎め
油断はなんねえ
いつまた、こつそり
くるかもしれねえ

これは
なんでもかうして両手で
かぶつた上から
年ヶ年中
あさえてゐるのに
かぎるやうだ

ぐるぐる
ぐるぐる

(これだけあ

子どもに

このまた帽子をゆづるときにも
よく云つてきかせて

やらずばなるめえ)

ぐるぐる

ぐるぐる

(なにがなんでも

無事で

帽子がもどつてよかつた

ぐるぐる

ぐるぐる

ぐるり

ぐるり

ぐ……る……り……

——走馬燈、びたりととまつた

雪

雪、雪、雪

貧乏人を泣かせるのなんか
なんでもないよ

この雪だけでたくさんだ

悪い奴等で

世界をみたり

そこをどふ泥のやうにするのも

みんな

このうつくしさ

それでだ

雪はうつくしい

ほんとにうつくしい

だが、うつくしいとはこんなものだ

いはぬばかりの雪——

その消えたあとはどうだ

だが、また雪の
この天上のうつくしさこそ
なんといつても自分達貧乏人のものではないか

飛行機

千草は五つ
はじめて飛行機をみるのだ
それがなんだかわからない
紙鳶かい
首をふる
そんなら、何
しばらくかんがえてゐたつけが

やつとおもひついたらしく

とつと
鳥よ

いくら自分達が説明してやつても

それは無駄であつた

子どもはなかなかその所信を變へるものではない

なんといつてもそれは

子どもにとつては

怖しくぶらうんとうなつて

天空をとんでゆく怪鳥であつた

それでいい

いいではないか

おう、子どもばかりが

ほんとうの飛行機を知つてゐるのだ

畢

昭和四年二月十六日印刷
昭和四年二月二十日發行
初刷一千部



詩集・土の精神

定價金貳圓

著者 山村暮鳥

發行者 金兒農夫雄

東京市小石川區白山前町二四

發行所 素人社書屋

振替東京一五九九四番

東京市小石川區關口水道町四一

印刷所 信成社印刷所

印刷責任者 道又好三

素人出版社 詩書

| | | | | | | | | | |
|-------------------|------------------|-----------------|-----------------|----------------|----------------|-----------------|-------------------|------------------|------------------|
| 自由歌 俳句 日記 | 井上康文著 | 井上陶山、中西金子、尾崎勝、著 | 目次緋紗子著 | 小野十三郎著 | 岡本潤著 | 井上康文著 | 尾崎喜八著 | 室生犀星著 | 萩原朔太郎著 |
| 創作手記 | 詩の作り方 | 詩華集籌 火 | 詩集 風 貌 | 詩集 半分開いた窓 | 詩集 夜から朝へ | 詩集 手 | 詩集 曠野の火 | 詩集 鶴 | 詩論と感想 |
| 菊半截四百頁 總洋布上製極美 | 菊半截一五〇頁 最上製美本 | 紙六判二百頁 裝極美 | 最上製箱入 四六判二百頁 | 紙六判一六〇頁 裝極美 | 紙六判一二八頁 裝極美 | 最上製箱入 四六判二百頁 | 洋布上製箱入 四六判一二八頁 | 最上製箱入 四六判二四〇頁 | 最上製箱入 四六判三百余頁 |
| 特價五〇錢 稅六錢 | 稅價五四錢 | 稅價壹圓二十錢 八錢 | 稅價壹圓五拾錢 八錢 | 稅價七十六錢 | 稅價壹圓六錢 | 稅價貳圓八錢 | 稅價壹圓七拾錢 八錢 | 稅價十二錢 | 稅價壹圓八拾錢 十二錢 |

東京小石川山前町四・振替東京一五九四

